

東京女子大学女性学研究所開所式に出席して

廣澤節子

上京する度にその変貌の激しさに目を見張る東京。20数年前、荻窪に住んでいたことのある私は、東京女子大学が西荻窪駅下車とのことで、懐かしさで胸一杯でした。会場の62番教室への道は、広々と見渡せるグリーンの中、こんもり繁った緑の大木と花畑と校舎が配置よく点在する、まるで一幅の絵を見るような美しさで、「東京にこんなところがまだあったのかしら」と目を疑いました。永年培われて来た文化と伝統がしっかりとその中に包みこまれていて、素敵な落ち着きを感じるキャンパスでした。

本学研究所長の別府先生と共に列席した開所式は、出席者一同心を洗われるような東京女子大学クワイヤによる美しいコーラスと、村上教授の祈禱で始まりました。司会は同学女性学研究所副所長、北篠文緒氏。最初に挨拶に立たれた京極純一学長は次のように述べられました。

「東京女子大学はキリスト教大学です。そして女性であれ男性であれすべての人が、かけがえのない個人、ただひとりの個性として、永遠から永遠にわたって、創造主なる神の御手に保持されている、これがキリスト教の信仰のひとつです。ほかならぬこの原理が、東京女子大学女性学研究所の活動を支える土台です。人類の歴史は、個人としての能力発揮と個性としての自己実現の機会を、男性に開放しました。女性もまた、女性という十肥ひとからの扱いでなく、個人として、個性として『自由と平等』の扱いを望みます。そのための地球全体と歴史全体を視野におさめた研究と教育が、この女性学研究所の活動であります。」続いて女性学研究所長の根岸愛子教授が、同研究所発足までの経過と将来に対する抱負を語られました。以下その内容を簡単に列記します。

A. 同研究所発足までの経過

75. 5. 第2回アジアキリスト教九女子大学代表者会議において、各大学に女性研究センターを発足させることを決定。
76. 4. 比較文化研究所内に Women's Studies 委員会設置。総合研究の企画・出版を開始。
78. 5. アジアキリスト教九女子大学学長会議開催。
80. 10. AWI「女性の生涯教育」開催。
83. 10. AWI「平和フォーラム」開催。

86. 青山なを記念基金による「女性史青山なを賞」設立。毎年、女性史の分野での優れた業績に対して贈呈。
87. 同基金による「青山なを研究奨励金」制度発足。
88. 5. Women's Studies 委員会を女性学センターと改称。
90. 4. 女性学センター、比較文化研究所から独立。女性学研究所として発足。

B. 将来に対する抱負

1. 人類が平和に豊かに人間らしく生きる。(同じ目的に向って男女が協力し合って向上してゆくこと。)
2. 国際交流。(殊にアジアの女性との交流。)
3. 日本の女性学研究所の優れた書籍の英訳と海外への紹介。
4. 学生たちにも男女の平等を教える。

以上のお話は、私共女性学インスティテュートにとってよき参考になると思います。この後お茶の水女子大学原ひろ子教授と元駐デンマーク大使の高橋展子氏により研究所への期待と激励のお言葉があり、海外からの祝福のメッセージも代読されました。

プログラムの中でも特に関心をひいたのは「女性史青山なを賞」受賞式です。神戸女学院卒業生で国際基督教大学名誉教授であり、青山なを賞選考委員である武田清子氏が選考経過を報告される予定でしたが、お風邪のため根岸研究所長が代わってなさいました。

ここで青山なを氏を紹介します。1923年東京女子大学国文科卒業後、東北帝国大学法文学部卒。日本思想史専攻。文学博士。1933年から1966年まで東京女子大学で教鞭を取られ、同学退任後、梅光女学院大学教授。1985年8月1日逝去。著書に『源氏物語研究及び古典諸論』、『明治女学校の研究』などがあります。

「女性史青山なを賞」の受賞対象は、1. 女性史である、2. 日本史である、3. 翻訳でない、4. 学術的である、5. 著者の年齢・性別・国籍は不問、6. 他の賞をもらっていない、であり、五回目を迎える今回の受賞者は「イナグヤ ナナバチー沖縄女性史を探る」の著者である堀場清子氏でした。氏が沖縄に暫く滞在して、女性の差別の厳しさに肌で触れ取材研究されたのがこの作品であり、七つの「バチ」(罰)を持って生まれるとされている女性の歴史を描いたもので、いわゆる女性解放

の叫びでもあります。

最後に、劇団モート所属の梅沢昌代氏により「女性－過去・現在・未来」というタイトルで、与謝野晶子「そぞろごと」などの詩が魅惑的に朗読され、開所式は幕を閉じました。

閉会后、記念パーティーがカフェテリアで催され、日本女子大学学長青木生子氏と津田塾大学学長天満美智子氏の祝辞等で大勢の参加者の熱気がいやが上にも盛り上がり圧倒されました。パーティーの途中で別府先生と研究所オープン・ハウスに参り、その立派に改造された研究所を目前にし、さすが東京女子大学だと思いますと共に、いささか羨ましい思いも致しました。

我が女性学インスティテュートもはやく研究所より独立し、独自の理想と希望と行動力を持って発展したい、いやしくなくてはならないと思いました。1991年にはAWI (Asian Women's Institute) 会議を本学で開催すべく準備しておりますので、全学の教職員の皆様方のご協力をお願い致しますと同時に、この会議が盛会でありますようにと、神様のお恵み深きお導きを祈りつつ、このたびの報告を終わらせていただきます。

熱帯林保護問題をめぐる アンニャ・ライト氏と学生達の対話

平井 雅子

最近、一種の流行になった感さえある、いわゆる（環境問題）。テレビを中心に、日本企業の深く関わる熱帯林伐採の規模の大きさと、それが引き起す土壌の流出のすさまじさ、昔からの方法で森で暮らしていた部族の悲惨な運命などを画像として見せられると、平穏な日本での暮らしに慣れてきた我々は、「こんな事が…」と、愕然とする。それにも拘らず、相変らずタイからマレーシア、マレーシアが駄目なら次はサモア島…と、ひたすら貪欲に安価な木材を求めて自然破壊を続ける企業のあり方と、我々の間に芽生えつつある国民的地球的良心とのギャップは、一体、どこへ我々を導いてゆくのか。怒ったところで、批判したところで結局、どうにもならない、我々に関係のない所で事が進んでいるのだ、という、言わば政治への無気力、無関心が、ようやく目覚めかけた環境問題への関心をも呑み込んでしまうのか。

底ぬけに明るく、エネルギーなアンニャ・ライト氏の講演は、何よりもまず、信念と勇気をもって行動する事、同じ想いの者達が語り合い、共に歌い、人の輪の楽しさを知る事のすばらしさを、我々の若い心に教えて

くれたようである。〈若い〉とは、何も年齢だけが若いという事ではない。事に感動し、強く憤り、勇気をもった言動を行い、楽しく友と語る、といった積極的な心の開き方と好奇心である。講演の後で、女性学インスティテュート主催で開かれた「アンニャ・ライト氏を囲む会」では、特に学生のみなさんの輝く目、次々と後を断たぬ質問が印象的だった。教室にぎっしり座った誰もが、目の前の茶菓子にも、ほとんど手を触れず、熱心に学生とアンニャさんのやりとりに聞き入っている。それは一方的な講演ではなく、まさに〈やりとり〉であって、例えば、こんな対話がある－

「私達が割り箸を使わなかったとしても、それが一体、どれほど熱帯林保護に役立つのでしょうか。新聞で、割り箸に使われる木材の量は微々たるものだと読んだことがあります。」

「それは、そうです。しかし、割り箸を使わない、という運動にはシンボリックな意味があるのです。誰もが簡単に、すぐに始められ、しかも、それを行うには少し勇気が必要です。人前で、そういう事が出来るようになれば、それは、『私は地球全体の環境を壊すような自然破壊には反対します』と、公言している事になりますから。社会的行動は、身近な小さい所から始め、それが多くの人々の間に広まっていくようにする事が大切です。“Think globally and act locally”（地球規模で考え、身近な所で行動せよ）という言葉は、環境保護運動のモットーになっています。」

それでも、釈然としないような表情の学生。一方で、

「その運動を、もっと多くの人々に広めるためには、私達は何をしたらよいのでしょうか？」

と、具体的方法を、さらに追求してくる学生。また、

「森林伐採を引き起す原因となる産業構造や、私達の家屋、生活のどこに問題があるのですか。」

と、的確な情報を求める発言。

「コンクリートを固める時の型に使う木材は、雑木でよくて使い捨てです。実は、これが最も多いので、木材家屋そのものは、それと比べれば問題になりません。」等々。

でも、飽く事を知らぬ神戸女学院生の知的好奇心は、実は、アンニャさんのような歌やパントマイム等のパフォーマンスを得意とする活動家から、さらに科学的に環境問題や産業構造、経済、政治を研究する専門家の知識を、しかも多角的視野と見通し、経験を持った優れた研究者や政治家（果して、いるか？）を求めているのかも…と、ふと感じたのだ。知的人間とは、一時的に他者やマスコミにおおられて、ワーッと行動する人間の事では

ない。ただ、入口の所で警戒し、ためらい、結局、関心を棄ててしまう消極的人間でもない。疑問に思う事は、とことん追求し、自分で納得できる答を見出していこうとする積極的姿勢。それは、アンニャさんを囲む会で示された様々な学生の対応の中に、それぞれの形で表れていたのだから、私は感動した。神戸女学院の大学生達は、やっぱり、すばらしい知性を持っているのだ。これが自然に発揮され、大きく育つような場が、授業の内外で出来るだけ多く与えられればよい。これは、文学の授業を担当する者としての述懐でもある。

そんな訳で、予定の時間を大巾に延長して、〈囲む会〉は続けられ、午後の授業の無い学生達は、アンニャさんと同行の中善寺さんを離そうとしなかった。中善寺さんは通訳として来られたが、通訳の必要もなく終始、英語で話は通じたから、むしろ話し合いに参加して自分の見聞きした体験を語る、という形で参加者全員が対等であった。これも、熱心に互いが語り合えた一因であったと思う。国際語というのは、そうして用いなければ意味が無い。

その後、JATAN（熱帯林行動ネットワーク）と、地球の友・日本（Friends of the Earth, Japan）を代表して、中善寺さんからの礼状が届いた。寄付は受けても、自身は無料奉仕の彼らである。神戸女学院生達も、一、二のクラブを中心に、アンニャさんとのきずなを深め、夏のディスカッション・セミナーに招いたり、環境保護運動を手がける動きもあるそうだ。何かのために、まいた種となった事を感謝する。



働く女性一母として

弓 削 佐知子

昨年末の婦人白書によると婦人労働者総数は1,720万人、雇用労働者数に占める割合が36.8%にまで達した。この社会情勢の下にあって依然として残る女性の社会進

出に伴う障害について考えてみた。

2年前の春、超音波診断によりおなかの子が双生児であることを知った。それと前後してかなりきつい腹部の張りが始まり、流産防止の薬を服用しての勤務となった。双子の場合、産み月までもたせても一人の場合と比べるとかなり小さく生まれる。早産をすると網膜症によって目が不自由になったり、脳性麻痺など取り返しのつかぬことになる。ドクターからそう告げられた。職場にあっては教師としての責任があり、休みをそうそうとすることもできない。腹部に陣痛をまねきような痛みを感じるたびに親としての責任を感じ、自分が今行っていることがとんでもない間違いではないかと自問した。知的な生涯を送りたい、社会に参加したいと願い、教師としての道を選んだのだが、子の命の尊さの前には知的に生きたいなどという考えはエゴイズムに過ぎないのではないかと。命の尊さを思えば家庭に入り、健康な子を産み育てることが女性としてというよりは人として選択すべき道なのではないか。思い悩んでいると過去の経験がよみがえってくる。大学卒業後、専業主婦となり、趣味に時間を費したけれども知的な好奇心が満たされず、内にあるエネルギーを注ぐべき対象が見つけれられずに探しあぐねていた経験が思い出された。

結局、妊娠7カ月まで勤務を続け、夏休みに入る8月に入院し、3カ月間寝たきりの状態で産み月までもたせた。仕事を続け、障害をもった子どもを出産された話を耳にするたびに他人事とは思えず、胸が痛む。一個の独立した人間として生きたいと願い、信じて歩まれた結果、思わぬ事態をまねくことがある。現在の社会制度下においてはこのように母性が働く上でのハンディーとなっていることを非常に残念に思う。

出産を無事にすませると育児においてまた壁に突き当たる。今の国の保育施設はまだ不十分で、私など実家の母に面倒をみてもらわなければ、働けないのが実情である。

出産・育児そして老人の介護問題まで女性の肩にかかってくる荷は重い。出産だけは別として、育児や老人介護はいずれも今の社会通念からすれば女性の役割だと考えられている。これらをどうにかこうにか乗り越えなければ、生涯職業をもち、スペシャリストとして生きることにはできない。男性社会が変貌しつつあると言われている。なるほど世間の意識という点においては昔とは大変違ってきた。しかし社会の仕組みは根本的に以前とあまり変わっていないのではないかと。ある条件の揃った状況においてのみ、女性が職業をもつことが許されているに過ぎないのではないかと。一体、世の中のどれだけの女性に

職業婦人としての道が生涯保障されているのだろう。

女性の社会進出が確固たるものになるためには社会制度のさらなる充実を願うほかない。制度や法律によって保護されることの意義をあまり考えたことのない私であったが、その重要性、必要性について考えるようになったのは法律の恩恵がいかなるものかを実際に体験し、痛感したからである。最近、高等学校でもワープロによる文書作成の仕事が多いが、妊婦が長時間ワープロを使用すると胎児に悪影響を及ぼすおそれがあるとして法的に認められ、教育委員会から文書が配布された。それによってワープロによる仕事が大幅に軽減されるようになった。職業人として妊婦だからという理由で仕事を選ぶことはできないが、このように法として認められると約束ごととして周りの人々から理解を得ることができる。法律によって守られていることのありがたみを身をもって体験した。

このような女性の立場に立った法律・制度による保護、保育施設や医療機関の増設・充実が必要である。これからの高齢化社会において、政府の限られた予算の中で、女性のこれらの要求がどれだけかなえられるかは大いなる疑問であるが、スペシャリストとしての道を歩むことを切望する女性の声の高まりとともに少しずつでも社会の仕組みが変化し、女性が職業を安心して続けられる環境が実現することを心待ちにしながら、教育の専門家としての道を歩んでゆきたい。(卒業生 E100)

「男たちよ」

丸 島 令 子

神戸女学院の創立者イライザ・タルカット女史は1836年の生誕である。その6年後、名をエレン・スワロー、婚姻名をリチャーズと呼ばれた偉大な女性が誕生した。彼女はバツァー大学の最優秀学生であったし、女性として初めて1870年にマサチューセッツ工科大学(MIT)を卒業した。これはアメリカの女性に自然科学の学位が授与された最初とされている。

エレン・スワロー・リチャーズは当時の男性優位の社会の抑圧を乗り越えたのみならず獲得した学位とその透徹した科学的な思考と方法を、人間存在の根本の生活と環境の諸問題の解決のために適用しようとした。

彼女が生きた時代のアメリカは産業化、都市化により恐ろしいまでに環境が悪化していた。また“ぶどう酒”

とって酒に合成着色料を加えたものが出まわって消費者問題が顕在化してきてもいた。

スワローは生物学者ヘッケルと同じ地点から、ギリシャ語の「家」(Oikos) からくる「すべての人の家」つまり「環境」の科学を発展させる必要があると考えた。彼女は社会と自然の全体を、物質的環境と社会的環境の基礎単位である生活の根拠としてのホームから捉える「環境と生活の科学」の創出を試みた。それ故、彼女はアメリカのホーム・エコノミックス(家政学)の母と仰がれている。

今日我々は、地球を覆いつくした観のある環境の危機を知るとき、科学とテクノロジーの発展が生み出すモノ(環境)が真に有用に人間と相互作用しうるよう、細分化された諸科学を総合させるというスワローの「学際科学」の発想が一層注目される。こうした驚くべき先見性は百年も前に一人の女性によってもたらされた。今改めて、男も女も彼女のメッセージを正しく理解しなければ、すべての人の生命が危ないのである。

1990年度前期活動報告

◎懇親会 4月27日(金)

オーストラリアの自然保護活動家アンニャ・ライト氏を迎えて。(詳細は本紙「熱帯林保護問題をめぐるアンニャ・ライト氏と学生達の対話」をご覧ください。)

◎第一回講演会 5月10日(木)

I Come of Age at Your Expense

: the Image of the Japanese Woman in

Contemporary North American Fiction

～現代アメリカ文学における日本女性像について～
スザンナ・パブロスカ氏(京都大学外国人教師)

◎第二回講演会 6月7日(木)

「21世紀の女性の生き方」

ハロラン美美子氏(大宅壮一賞受賞作家)

〈講演会のテープは貸出できます。〉

女性学インスティテュート編集委員

別府恵子、中原満子、谷祝子、上西妙子、渡部充(ABC順)

編集: 神戸女学院大学女性学インスティテュート

発行: ☎662 西宮市岡田山4-1 ☎(0798)52-0955(代)